

## いま 子どもの「現在」を奪って「未来」は無い

### - 杉並・和田中、夜の塾について思う

青木 悦 教育ジャーナリスト

私の名前は「悦」。思春期のころ、男子生徒から「悦楽の悦」などとかかわれ、乙女心(?)を傷つけられた。さらに「悦子」ではないために男か女かわからないともいわれた。一九四六(昭和二一)年生まれのため、私の母が、それまでずっと男に服従してきた歴史へのハラ立ちがあったらしく、女の子だから必ず「子」をつけるというのはイヤだと思ったという。

二歳下の妹は「公子」こっちには「子」がついているから母の信念もここまでかと思うけれど、妹の場合は「公」に強い願いがあったという。戦争が終わって、新しい時代が始まる、その時代は「君」の時代ではなく「私たち」の世、つまりそのころ「公」の文字は「私たち」という意味を強く持っていた。そういう意味では当時はキラキラ光る文字であった。

私は今でもこの「公」の字に「私たち」という思いをくっつけて使っている。しかし20年ほど前から変化を感じるようになった。「公」という字に権力をくっつけてとらえる人が増えたと思うのだ。たとえば「公教育なのだから、みんなで意見を言えばいい」と私が言うと、「公教育だから言ってもムダです。それならはじめから意思表示している私学を自分の目で選んで子どもを行かせた方がましです」などの答が堂々と言われるようになってしまった。

子どもを公立学校に通わせるか私立学校に通わせるかの質問の中の会話であるが、この会話の中に「公」と「私」の区別の危なさが出ている。はじめから意思表示している「私学」なんてどこにあるのか、その意思表示は正確なのか、「自分の目で選ぶ」というがその選ぶ根拠は何なのか、成長していく子どもとピッタリ合うと言い切る自信はあるのかなど、いくつも疑問が浮かんでくる。しかし私の言う「公教育なのだから…」も、妙に迫力がないことばになっている事実がある。

ただ、迫力はないけれど、公教育と私教育の区別ははっきりしているはずである。子どもを学校に通わせる側の我々から言えば、「税金で運営されるから、基本的にはタダの公教育」と、「いくらか余分にお金を払わなければ行かない私教育」であり、私教育の方には進学名門もあれば、公立の救い主(ひろってくれる)もあり、いくら多様な趣があるといったところだ。もっとも最近では各県に公立のスポーツ専門学校などもできて、進学名門も昔から公立が強い県もいくつもあって、多様性という意味から考えれば公、私あまり区別はない。厳然たる区別があったとすれば両者の平等性であろう。

## 公教育は平等要求を持つのに

「私」がお金も出さずけれど自由にやらせてもらう(現実には、どこまで自由か別として)というのに対し、「公」つまり国や県や市や区がやることはとことん平等であるべきだという違いは、多くの人がかんじている。特に今の子育て真っさい中の人たち(30~40代前半)の特徴として、違いも何も認めない徹底的な平等要求がある。

ある公立小学校で、乾燥した風の強い日に、午前7時半に学校の事務の人が校門から庭にかけて水をまいた。その頃登校してきた児童はよかったけれど、数十分で乾燥してしまい、その後登校してきたひとりの児童が砂ぼこりが目に入って傷つき、数日間眼科に通った。この後者の子どもの母親が私に、「学校は平等に水をまくべきです。子どもが登校している間はずっとまくとか、全くはじめからまかないとか、平等にすべきだとは思いませんか」と言った。

私は「それまで平等ということばを拡大解釈したら、やっていけませんよ。学校があなたのお子さんの登校の前にも水をまいてなければ、あなたのいう不平等は起きないのですが、もっと多くの子が目にゴミが入ったかもしれません。早朝、水をまいてくれる人がいて、助かった子もいるはずですし、抗議する種類の事ではないと思いますが」と言った。すると彼女は「じゃあ、うちの子が不運だったというわけですね」と言う。私はもうめんどうくさくなって、そうですねと言ってしまった。相手は不服そうであったが。

こういう平等性を主張している人たちが、絶対にそれを持ち出さない分野がある。「学力」の分野だ。悪平等といえるようなことを言う人が、「伸びる子をさらに伸ばす」とか「学力的意欲を封じるな」とか、口にする。個人の能力には個々がいはあろうが、それを修得していく機会は平等でなければならないのに、「学力」つまり「成績」がからむと、いきなり論理も何もないゴチャゴチャが始まる。

## 真のモンスターは？

先述の「水をまいた、まかない」で抗議する人はおそらくからかい気味にモンスターペアレックスと言われるのだろう。しかし私にいわせれば「学力」を伸ばすことのみを価値とし、それも正確に言えば点数を上げることのみを「教育」と称して、平等であるはずの公教育の場に完全に「私」産業である塾を引きずり込む人たちこそ、モンスターである。

一月から実施された東京・杉並区立和田中学校の、塾による夜授業は、「学力」などということばの分野では公と私の区別が全く無くなっていることの証明といえる。

黙っているわけにはいかない。杉並区っていったい何やってるんだらうと、びっくりしているだけでは済ませられない。子どもたちはさらに追いつめられていくのだから。

今だって、授業、部活、塾、スポーツクラブと、へとへとになっている生徒はたくさんいる。私のところにはそういうところで追いつめられた子どもの声が届く。

高一の男の子、あるスポーツをやりたくて私学を選んだ。部内のシゴキでひどい傷を負ったが、学力にも厳しい学校だったので、傷をかくしてテストを受けた。傷は悪化して、

学校生活をあきらめざるをえなくなった。彼は荒れた。「子どものときから、やりたかったことをすべてがまんして、がんばってきたのに」。自分の部屋に複数の女の子を招き入れ、傍若無人の“共同生活”を始めた。彼の「やる気」をほめ、「努力」を評価していた両親は「ガッカリした」と言った。私は怒った。「ここでこそ親の出番じゃないですか」と。

これ以上、子どもを“伸ばさ”ないでほしい。これ以上、子どもを欺かないでほしい。努力の果てに待つものは何なのか、それをさがすのは子ども自身なのだから、がんばればすばらしい未来があるなどと欺かないでほしい。未来は、子どもの「今」をつぶして見つかるものではない。「今」はどの子にも平等に与えられ、大切にされる時間だ。部活で体を傷つけた少年に、その「努力」のまっさい中に、「体の方が大事だ、休め」と言ってやるのが、モンスターではない大人のはずだ。休んでも保障されるシステムこそ本来の「公」ではなかったのか。言いたいことは山ほどあるが紙数が尽きた。杉並区の「教育」に足元を崩されないために杉並区の人ともつながりながらがんばりたい。

(あおき えつ)

「子どもと教科書全国ネット21NEWS」VOL.58(2008.2)より